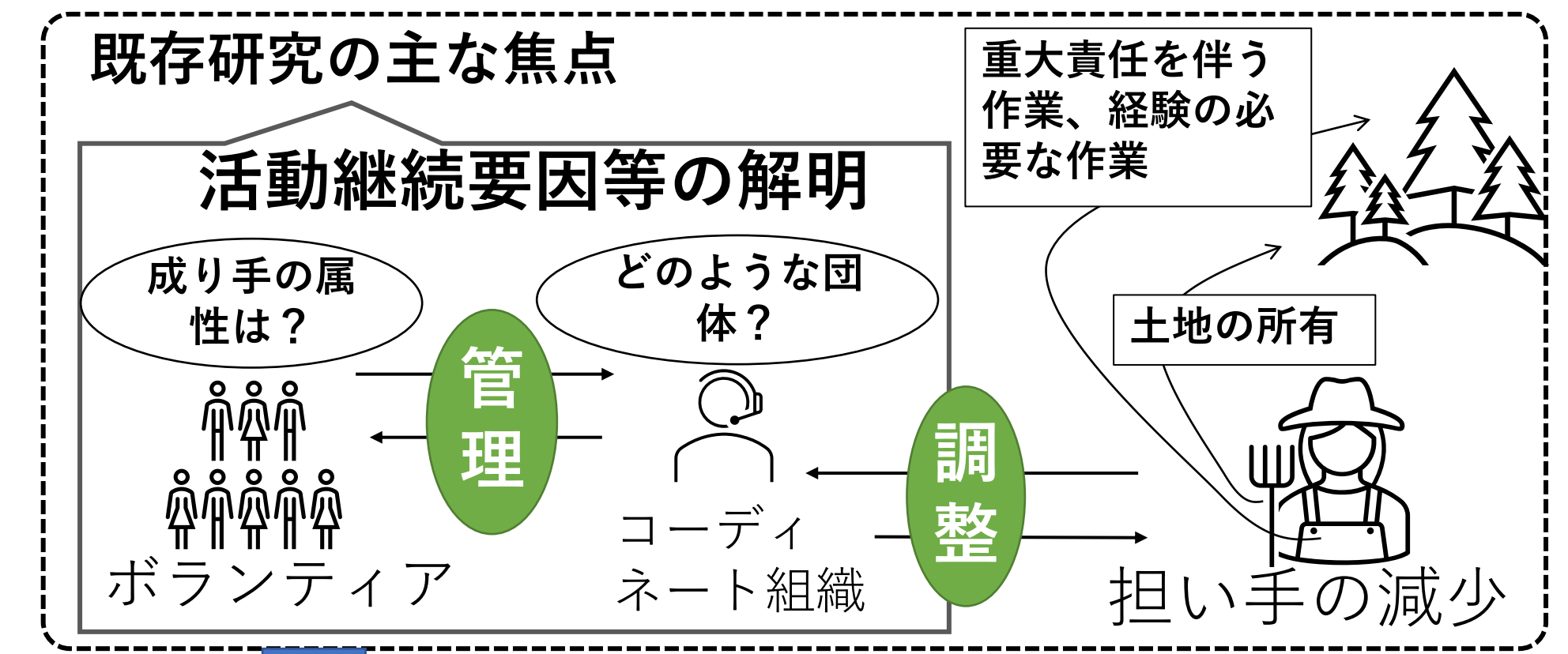


阿蘇の草原における野焼き支援ボランティアの課題 —ボランティアが足りていても活動が出来ない! ?—

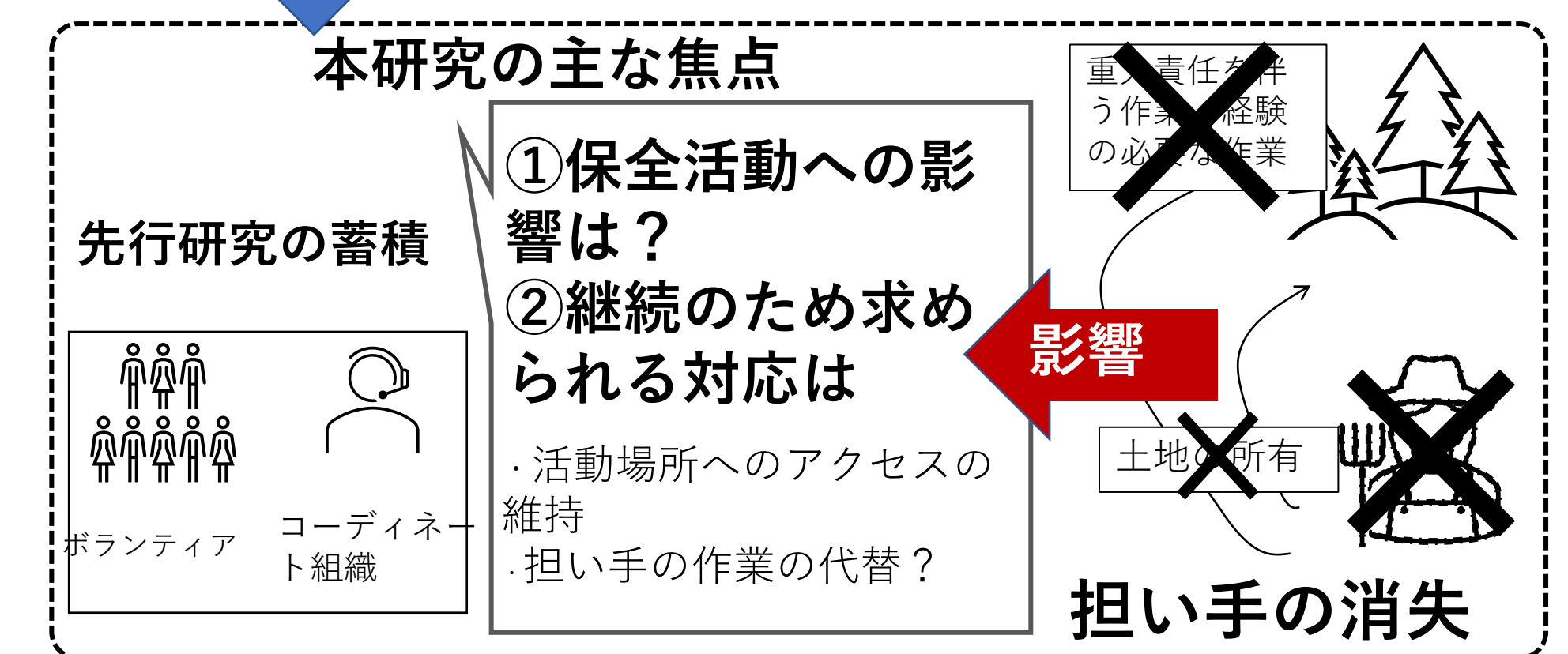
竹内亮 福岡女子大学国際文理学部環境科学科 講師 メール: ryo.takeuchi@fwu.ac.jp

1. 研究の目的と背景：自然保全ボランティアが直面する課題

本研究の目的は、地域の自然を保全してきた農林業従事者（地域の担い手）の減少が自然保全ボランティア活動に与える影響を解明することである。自然保全ボランティア活動は、森林や農地といった身近な自然環境の保全に大きく貢献している。その活動はあくまで地域の担い手の支援という形で実施されてきた。



将来 従来の担い手が急激に減少し消滅する事例が発生し始めている。



社会的・経済的要因によって、地域の担い手は急激に減少している。将来的に地域の担い手がなくなったときに自然保全ボランティア活動にどのような課題が発生するのかは不明となっている。特に活動場所へのアクセスや経験や土地勘が必要な活動の実施は焦点となる（右図）。

2. 調査内容

阿蘇グリーンストックによる野焼き支援ボランティア活動への参与観察

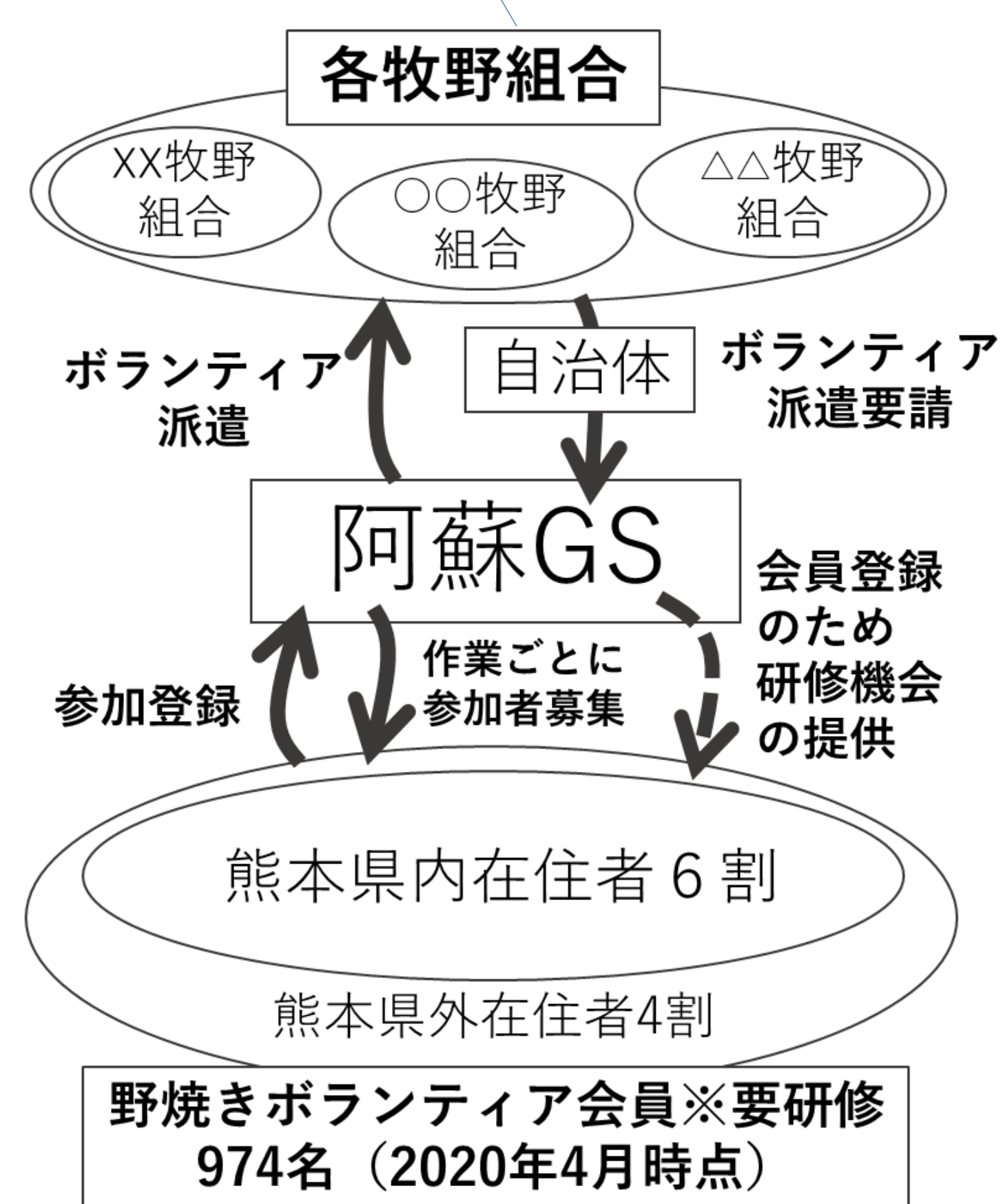


写真：野焼きボランティアとしての参与観察の様子

内容：野焼き支援ボランティアに実際に参加、観察を行う。地域の担い手が減少している2023年度に5回の参与観察を行った。

目的：実際の活動において地元の人がないことで活動にどのような影響が生じているのかを確認する。またそのような課題にボランティアがどのように対応しているのかを確認する。

牧野組合 = 草原の所有・管理者
本研究における地域の担い手
組合員が減少して、活動が困難に



(公財) 阿蘇グリーンストック (阿蘇GS) = 自然保全ボランティア 1999年から活動

3. 結果

指示役がないことによる作業効率の低下：

従来はボランティア5-6人のグループ一人に牧野組合員1名がつく形で毎年の経験に基づき、作業内容の指示を行っていた。しかし、組合員の減少および高齢化により牧野組合員のいないグループが発生している。観察した10牧野組合中8牧野組合。

→無線による情報共有を行っているが、**臨機応変な判断が困難**に。作業効率の低下および**事故のリスクの高まり**。



火引きといった重要な作業が実施困難に：

草原の管理において決定的に重要な作業である野焼きにおいて、火をつけるのは責任の問題から牧野組合員しか実施できない。組合員の減少により火引きが困難に

→火消しをするボランティアの数が十分であっても、火をつける役がないために、**活動自体が困難**に。



4. 考察：新たなボランティア体制の構築の必要性

以下の点に着目して、ボランティア体制を早急に見直す必要

情報の蓄積および共有：

ボランティアは毎回、異なる現場に参加するため、活動場所に特徴的な経験や知識を持ち合わせていない。特定の地域に特化したボランティアリーダーの育成や、事前に資料を配布することなどが効果的な対応として考えられる。

ボランティアによる基幹作業の実施：

高度な講習を行うことにより長年の経験や、土地勘が重要な作業をボランティアが行う必要。また、物損や人身事故が発生した際の責任の引き受けが問題となる。

活動場所の所有：

今後、地域の担い手の減少が進むことにより、活動場所の所有者が不明となったりすれば、ボランティアが活動場所へ入ることが困難になり得る。アクセスの確保も重要な検討事項となる。

研究の意義

本研究は新規性、速報性の高いものであり、今後出てくる同テーマの研究をリードし、その比較対象となる。またこの担い手消失問題に対して実効的な解決策を提案するものである。

研究の課題：今後は今回の参与観察に基づいた聞き取り調査を主要なステークホルダーに実施する。(科研費課題2023-2024)。

参考文献

横川洋・高橋佳孝編著 (2017) 『阿蘇地域における農耕景観と生態系サービス』 農林統計出版。

本研究には、公益財団法人阿蘇グリーンストック様に調査、事実確認において多大なご協力をいただきました。

※本研究には、2022年度福岡女子大学研究奨励交付金Aの交付金を活用しました。

(写真：竹内撮影)